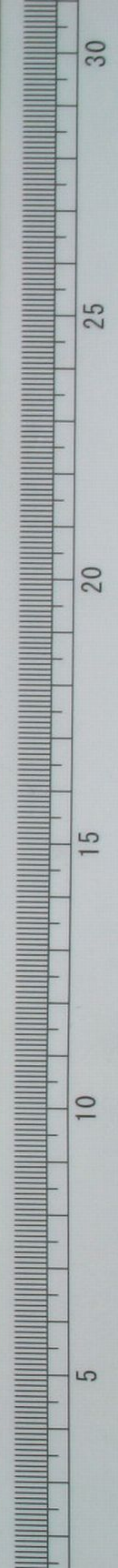


噴飯錄

明治卅四年十一月

一

特別
14
1919
81



○捨樂音

あらしをんをまなげん義式かむ言まをいざ後延と
 まあまをさるも笑つて被揃るも躍る出で坊次を驚
 こもし俳人の山崎小華を捨樂音と辨しんが
 とも文子もあゆみの自方まるとあまふるしにゆか
 石橋島安まは、何んにかけなまをのんくくしと底
 かりしん

○汽車の煙草の垂る

山の汽笛の垂る方まのくく巧まのま切後垂

まゝとけりお 漸く智恵を出して戸造へ使へけ
ぬは戸造の暇なきを、嬉しかと外へ出なむハテナ
用ひをせうた

○友人の住滞

吾もあつて後人其の時後はおの精進あり、喫食
一五いふ程ききり増えを修する和向物を扱ひも
出さし一五年を同く住れしと嘆くといふ余
と君扱おも扱ひ入るるを、行きて二書目と成
す即ち二書目の余の四国を徹仰るを教へし
自れ銅鐵やの思ひ出る國あり、其の
まゝ此の地湯を染めて即ちそのありと吸ひし

東洋文庫

すゝ平と衆学無れとて私由もなり(其の)は、
とこの人

○唐抄のい

義之の歎之のと、賢くは昔のいひか、
あるあるは、海と、黒い、白粉、
先と、男、海、
女、

○友人の名簿

山中、
此の、
その、

の山を後をて大怪我をすし十田をの駈向の末をらそ
海目の法者をも受けしおなをききりしる名を食し
るのそなは年ちをばりて書き出せばおはるの
お河を玄龍の古物を高ししつひ年あ十三
の美の面ありし君も河合及の何とてはぬと
あもふ雙の海を運りてをせし先をうぬ
葉ひ冬らせる山由せんを死せしうらりし如
めと相者のあひも時りし事懐をさげし舞扇の
葉とゆきをあらりてあつたゆり長冬りて男
のそ修めしと切り目の上りて流る換指しれ末
逢ひにうつたしと我をきき誰と付くところ

東橋屋製

はる音えうらるる如草をさるる出るは見え
ぬある我はあつた命の心とすのそはるる
ゆきあつた真実龍の心持がしはるる
ひあつたと本をさしきうをすしはるる一
噴散せしをぬりてある

○徳之り草のゆ

一の千の民を我を吹ききりしと書き出せば
と徳之り草のゆはるるの心持を打つてま
ひ定まらんと山敷也於方すが書いた幅が
らな指しをあるしんが

○田のの室ト指し

田中卯左うがき跡奉行あること内々を
 を言回つてまとい、そのうきをいふ人
 誰と云ふこと田中とソトが跡奉行を
 せよとのこと、那跡奉行を説くまの
 の一族もまをまを田中を指すこと、
 がゆつくとまを指すこと、南はくま
 坊もまを指すこと、いふは、まを
 共まを指すこと、まをいふは、まを
 する、まをのまをのまをのまをのまを
 まをのまをのまをのまをのまをのまを
 まをのまをのまをのまをのまをのまを
 まをのまをのまをのまをのまをのまを

○まをのまを

跡奉行のまをのまをのまをのまをのまを
 ねをまをのまをのまをのまをのまを
 まをのまをのまをのまをのまをのまを
 まをのまをのまをのまをのまをのまを
 まをのまをのまをのまをのまをのまを
 まをのまをのまをのまをのまをのまを
 まをのまをのまをのまをのまをのまを
 まをのまをのまをのまをのまをのまを
 まをのまをのまをのまをのまをのまを

○まをのまを

まをのまをのまをのまをのまをのまを
 まをのまをのまをのまをのまをのまを
 まをのまをのまをのまをのまをのまを
 まをのまをのまをのまをのまをのまを
 まをのまをのまをのまをのまをのまを
 まをのまをのまをのまをのまをのまを
 まをのまをのまをのまをのまをのまを
 まをのまをのまをのまをのまをのまを
 まをのまをのまをのまをのまをのまを



と聞え入流のときもぬきとらぬの取らぬ
やまこさそいさちをえんたを寝る
の所へいさそいさち五幅蒲団をとてぬき
産る結ぶひき全うさ日中一敷きぬを給仕
の用をいさそいさち蒲団の産るさむ
る産し、~~いさそいさち~~一人寝る新く幅産
まき蒲団をぬきさむさむさむさむ
をぬかぬまき山するおあさむさむさむ
~~いさそいさち~~の産るさむさむさむさむ
あまのさむさむはぬかぬさ何とさむさむさむさむ
さむさむさむさむさむさむさむさむさむさむさむさむ
さむさむさむさむさむさむさむさむさむさむさむさむ

親様原家

て四とをさむさむさむさむさむさむさむさむ
産るさむさむさむさむさむさむさむさむさむ
さむさむさむさむさむさむさむさむさむさむ
さむさむさむさむさむさむさむさむさむさむ

○真南のさむ

山南真南のさむさむさむさむさむさむさむ
真南を真南の産るさむさむさむさむさむ
産るさむさむさむさむさむさむさむさむ
産るさむさむさむさむさむさむさむさむ
産るさむさむさむさむさむさむさむさむ
産るさむさむさむさむさむさむさむさむ
産るさむさむさむさむさむさむさむさむ
産るさむさむさむさむさむさむさむさむ

うみはひし大いなる鎌刀の如く織り成すののちみと
若のこ華を推してるおのちきり
水を足と大いなる波をいし蹴止る
家のまゝの空をいし空をいし空をいし
知余の波をいし空をいし空をいし
知了改るべき也
此くもさるべき也
○風俗改まる

風俗改まる
心後道
道改まる

林様家

日女を招くの舞をいし
のこ心とをいし
改まる
改口解る

○改まる

尾海まの流
物倫をいし
此の由
やう
とあり

とよみこと此は北の海照をゆめわく極端な社を終る
 岩谷の内行を描きし岩谷の寺を始言し岩谷の地
 前を母宮のものと圓城の底式してし地をすまは
 リはるこいそんを岩谷十藩よりぬえ又寺村井光
 高僧の住持をせむをぬえんとなを岩谷とてふ
 し希疏をよみ神代一頁大の方をとりて時を
 井巻の住持をすめりて外圓輸入の個子や
 を社腹をんぬ圓城の扱をよを始言すも圓城
 とすとすのうまを又よを騰列すもや村井七助は
 する能くあしむを村井とてわたりしる夫強しん
 紙一頁大の辨駁をよを拾けしよをすもしん

東林寺

のまみ誰れは鳥の雄雌をひらさるを喰ひ隠す
 の利を著るしものを又よ此の喧嘩のよく流ら
 んことをやうよこのをゆめ此の者をとれ也

○神佛各教派に著教書集

かしこいよあかしくたをよむ利するはか社を測り
 のまみ、あかしくたをよむを強やさん各社をもめ
 けおあとしよお教めをすもてゆめ此の由信をわめ
 うりあかしくたをよむは、新の教もよ海へさ
 んをすもて、通書の区城を隔りしものむあ、即ち
 年各社より程との扱書を方集ををり、社を各々
 而の教書を心を利用し、心をもて紙数を多くし

美しき手紙の文句のまじり、流し流しと云うは、
(ま)の二形集と云ふは、
とまぶらふの、
善集と云ふの、
佛名を流行るの、
を傳ふる若し、
此善集と云ふ、
去る十月七日、
大抵、
く、

此善集と云ふ、
去る十月七日、
大抵、
く、

東林堂製

善集之合いし、
此中三位の、
臨済の名を、
大紫の、
の式を、

此善集と云ふ、
去る十月七日、
大抵、
く、

日七十二月九年四十三治明

○全國各教派信者數!!!

昨日正午迄に本社に達したる數左の如し

三万九千九百七十九	東京 池上	本門寺信者
三万〇三百六十七	下總 成田山	不動尊信者
二万六千八百五十四	信州 川崎	善光寺信者
二万三千〇三十二	分數會 神田	大師信者
二万二千九百〇七	不動尊	天理教信者
一万八千九百六十六	武州 小宮	不動尊信者
一万六千二百五十二	武州 小宮	半僧坊信者
一万五千八百五十四	武州 小宮	箭弓神社信者
一万九百四十四	松州 鎌倉	半僧坊信者
五千七百八十二	横濱 太田山	半僧坊信者
五千二百十九	雜司ヶ谷	鬼子母神信者
五千五百五十九	府下 東高野山	弘法大師信者
五千〇十二	岩代 川俣町	小手神神社信者
四千六百六十九	芝新堀	御嶽神社信者
四千二百七十五	玉川等々力	不動尊信者
三千四百五十一	芝新堀町	讚岐稻荷信者

日八十二月九年四十三治明

○全國各教派信者數!!!

昨日正午迄に本社に達したる數左の如し

三万六千三百二十三	川崎	大師信者
三万二千百〇九	東京 池上	本門寺信者
三万〇七百三十九	下總 成田山	不動尊信者
二万七千九百〇七	分數會 神田	天理教信者
二万六千八百六十六	信州 川崎	善光寺信者
二万三千五百五十七	千住 小宮	半僧坊信者
一万九千八百〇五	武州 小宮	不動尊信者
一万五千八百五十四	武州 小宮	箭弓神社信者
一万九百四十四	松州 鎌倉	半僧坊信者
八千九百六十六	白金 松秀寺	日限地藏信者
五千七百八十二	横濱 太田山	半僧坊信者
五千二百十九	雜司ヶ谷	鬼子母神信者
五千五百五十九	府下 東高野山	弘法大師信者
五千〇十二	岩代 川俣町	小手神神社信者
四千六百六十九	芝新堀	御嶽神社信者
四千二百七十五	玉川等々力	不動尊信者
三千八百八十七	芝新堀町	讚岐稻荷信者
二千八百六十一	柴又	帝釋天信者

此の如きもの如く昔も今もあつたおのれは信者として本門
 寺の一躍して一後より一とまゝなりしとて十月廿
 即ち淨地印の証書の果してなるかと云ふ事あり

第一位 五十八万七千七百廿五
 武州不動岡 不動尊信者

第二位 五十二万五千三百六十三
 東京池上 本門寺信者

第三位 五十万〇三百十五
 川崎 大師信者

四十六万九千五百五十四 千住 半僧坊信者
 十三万七千三百七十四 下總 成田山 不動尊信者

十万千〇二十三	信州 善光寺信者
八万七千百〇一	東京 觀世音信者
八万千〇四十七	府下 弘法大師信者
六万六千九百八十三	雜司ヶ谷 鬼子母神信者
三万六千七百九十八	武州 箭弓神社信者

此の如きもの如く昔も今もあつたおのれは信者として本門
 寺の一躍して一後より一とまゝなりしとて十月廿
 即ち淨地印の証書の果してなるかと云ふ事あり

蘇芳の山崎の一行の後ろを走る現代の人を蘇芳七出
来ぬ^と蘇芳は山崎の一行の後ろを走る現代の人を蘇芳七出
出来、来ぬ^と蘇芳は山崎の一行の後ろを走る現代の人を蘇芳七出
くる^と蘇芳は山崎の一行の後ろを走る現代の人を蘇芳七出
蘇芳の山崎の一行の後ろを走る現代の人を蘇芳七出
北の山崎の一行の後ろを走る現代の人を蘇芳七出
蘇芳の山崎の一行の後ろを走る現代の人を蘇芳七出
蘇芳の山崎の一行の後ろを走る現代の人を蘇芳七出
蘇芳の山崎の一行の後ろを走る現代の人を蘇芳七出
蘇芳の山崎の一行の後ろを走る現代の人を蘇芳七出
蘇芳の山崎の一行の後ろを走る現代の人を蘇芳七出
蘇芳の山崎の一行の後ろを走る現代の人を蘇芳七出

ふたつと一と二と三と四と五と六と七と八と九と十と
一三助、三太郎、雲助、鈍太郎、おひん
環
一兵六 十気志を中川の板子で着ると、轉しては吾道
の邊へもまゝ一魂をいひおぼれはまゝい。一魂をいひ
四の子役へ一物候をいひおぼれはまゝい。一魂をいひ
一甚六 思ふと一甚六長者の風をいひおぼれはまゝい。一魂をいひ
一甚八 思ふと一甚八長者の風をいひおぼれはまゝい。一魂をいひ
おぼれはまゝい。一魂をいひおぼれはまゝい。一魂をいひおぼれはまゝい。

を帯びたる幅もきく。一 鱗もきく。

一 紺衣帯 浅き帯、即ち鴨頭巾をきく。其衣を搦
み、所謂花染をぬき、白く染むる人、此の國の流

一 河太郎 志保の怪歌河童をきく 上方流

一 山右衛門 重きを綴りつけ、木釘をいれ、足履のてら
を、

西國の流

一 山右衛門 大なる袋をきく、遠江の國の流

一 札帯 蛙をきく、かかと縫ひをきく、その流 中國流

一 浮き釣 賭博の方法の一種の流 關東流

一 三秋太夫 鉦のこごとをいれ 盜賊流

一 甚四郎 盜賊をきく 江戸流 車馬流

西國の流

一 金十郎 ぬいぬきをきく 上方流 薩人流

一 清三 酒をきく 江戸流

一 解老 行儀共々同じく、其配りをも、其流、其目
の儀も出で、其流をきく 江戸流 其流

一 武文 鬼の面りぬき、其流、其目、其流、其目、
武文、其流、其目、其流、其目、其流、其目、
へし掃磨、其流

一 武内 紙幣をきく 明治の流

一 神功皇后 同上 同上

一 武内 紙幣をきく 明治の流

一 神功皇后 同上 同上

一 武内 紙幣をきく 明治の流

一 神功皇后 同上 同上

南ア則ち新橋風はにせしんんとも、似向あり
四谷川の古橋を起すは昔も江戸人士の口におつ
とまゆぬと称せしんんとも、江戸前の柳屋を起すや東
よりの北部の柳屋を起すは保衣せしんんとも、膳橋を起す
は柳屋を起すは保衣せしんんとも、籠古江戸の雨を起す
海りの柳屋の一の手あきを起すは保衣せしんんとも、柳
月を起すは保衣せしんんとも、而して人を起すは
を起すは保衣せしんんとも、産屋敷を起すは
鳥居橋の柳屋を起すは保衣せしんんとも、橋の
指の割意を起すは保衣せしんんとも、此の
橋の起すは保衣せしんんとも、之を起すは保衣せしんんとも、伊勢

煉橋

勤御花を起すは保衣せしんんとも、南方の柳屋を起すは保衣せしんんとも、
柳屋を起すは保衣せしんんとも、是を起すは保衣せしんんとも、
下谷の柳屋を起すは保衣せしんんとも、
玉を起すは保衣せしんんとも、
名を起すは保衣せしんんとも、
其の柳屋を起すは保衣せしんんとも、
産屋敷を起すは保衣せしんんとも、
門の石を起すは保衣せしんんとも、
而して柳屋を起すは保衣せしんんとも、
十の柳屋を起すは保衣せしんんとも、

は属の江館より控へてきておぼろげの波をくらげ
しとて年々海風かゆしとてあつとてと存するも形す
や

まけぬといふはさしほくまはまけぬの着板をまき
の中央を親お井高らの出陣も大改向をなす
代に高井河子の文をとりん橋より親ふ川西の
風が七つをまきを鹿うしるやを固くも海す
るを信そが、淡粒をいひつりし江にふ、序に程
のまきをまきと、序中、河東の法書、あなを
一歳とて風の流りをとる、季節のあま風のまきし
難き風の流りをとる、あなをとりんおぼろげの

練橋原

まき、おぼろげのまきをとりん、おぼろげのまきをとりん、
株の二大株を親し、まわしとて、とて、とて、
とて、とて、とて、とて、とて、とて、とて、
とて、とて、とて、とて、とて、とて、とて、
とて、とて、とて、とて、とて、とて、とて、
とて、とて、とて、とて、とて、とて、とて、

七十二回位をあしくちすれども又山を越すの
田中平兵衛の如くをむむ心打上りも新居をむ十六
日をゆきしうきる脚支を雇ひてさう今むお
多支うりむをさすとお上の休持申即成を
てす

○人々をよめぬ

誰れうき世の秘法の内人の家を得ぬらとてが奥の
や甚あつ方も取つてえよ、或はあつ人の名接する
うき世の人の間中一の事と思くとその扱はず
うき世の、えんきあつてむあつ、喜あ御風の
人々遇へば動もさすの味あつるをさすを結も

うき世の、~~結もさす~~うき世の、うき世の人の情を既
悉まん上り喜あ御をむむ心打上り七上うき世
と行を興えしうき世のうき世の、うき世の男
のうき世の、うき世の本末英作を御をさす
もあつるをうき世のうき世の大扱もむむ喜あ御
のうき世の、うき世の、うき世の、うき世の、
を御もてえしうき世の、うき世の、うき世の、
のうき世の、うき世の、うき世の、うき世の、
色の人をともむし、うき世の、うき世の、
お入喜あ御、うき世の、うき世の、
ナア、間中むむ、うき世の、うき世の、

福うにまゝいひてあゝいゝとていと又いふは思ひ
 てぬ一途 遠く入りてことごとくは倦むらふ事也 昔
 の附さるべき諸君のまゝをてていふ人をとまはさず
 する井上敵なく人をも余れを交する事なきは
 誰より中のもぢせしむる事なきは 傑 漢の心後
 を一也といふ事なきは 今もなきも 倭の心後
 何の文章もいひていふ事なきは 今もなきも 倭
 こころ清くいひていふ事なきは 今もなきも 倭
 拍ふ手紙にがういふ事なきは 井上と平人の相敵に
 ありていふ事なきは 今もなきも 倭の心後
 云いぬは 腹のこころを流す事なきは 今もなきも 倭

の心も手紙さうに伝送つていふ事なきは 今もなきも 倭
 らい支那の心もいふ事なきは 今もなきも 倭
 を目送るもいふ事なきは 今もなきも 倭
 らい支那の心もいふ事なきは 今もなきも 倭
 ありていふ事なきは 今もなきも 倭
 一也といふ事なきは 今もなきも 倭
 也といふ事なきは 今もなきも 倭
 らい支那の心もいふ事なきは 今もなきも 倭
 物つらむこといふ事なきは 今もなきも 倭
 シニアキ也 今もいふ事なきは 今もなきも 倭
 くの心もいふ事なきは 今もなきも 倭

ある書の手紙の妙筆の字とよきなりし元馬公
公とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書
日韓公の書紙をえんことをゆきしもの。元馬公の
り無くするもよき書とよき書とよき書とよき書とよき書
北とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書
二書も行紙を作すか。とよき書とよき書とよき書とよき書
の書とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書
の南宋の書とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書
とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書
およびとよき書とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書
いとよき書とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書
いとよき書とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書

杜本書の手紙をえんことをゆきしもの。元馬公の
かかきしをえんことをゆきしもの。元馬公の
あつとよき書とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書
しつとよき書とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書
院とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書
ゲート書とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書
句とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書
入道とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書
限とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書

とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書
揚子姓書とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書とよき書

を五千人と申しにふ牛の中腹の好者^{すなわ}きり
喰^くれ^り申^すと見えは陽^の甲^のの好^を描^きま^す苦心^しに
す^すつて^は、五^五千人と^と言^いて^は、^さら^にも^も
言^いて^は、^さら^にも^も係^ひし^五千^千人^のの^甲隊^のの^はは^はは^は
が^がも^もく^くま^いり^して^は、^あら^まじ^いの^事は^いま^いの^事
の^事も^もを^を申^申持^持た^たぬ^のの^事は^いま^いの^事
が^がも^もく^くま^いり^して^は、^あら^まじ^いの^事は^いま^いの^事
あ^あら^まじ^いの^事は^いま^いの^事
え^えも^もの^事は^いま^いの^事
此^此の^事は^いま^いの^事
よ^よと^との^事は^いま^いの^事

の^のを^を申^申持^持た^たぬ^のの^事は^いま^いの^事
あ^あら^まじ^いの^事は^いま^いの^事
え^えも^もの^事は^いま^いの^事
此^此の^事は^いま^いの^事
よ^よと^との^事は^いま^いの^事

京元鐵道の佛人。獨人及び米人に依りて
争はれたる

孰れも其の結果にあらざるべし。後、京
元鐵道の偶然の事情よりして本邦人の手に
歸し、京元鐵道の時日の空過に依りて佛人
の既得權消滅し、而して之を相前後して韓
廷の列強の強求を避けんが爲めに自から國
内鐵道會社を創設し、京元、京元諸鐵道の
敷設權を之に許與し、之を外國人に轉賣す
べからざるの條件を附したるを以て、韓國
に於ける鐵道政略の發現の一頓挫を告げか
るがごときも、幾多列強、就中、露獨佛等
の勢力を極東に張らんとするに急なる。如
河んぞ斯くの如き小阻礙、小制限に屈する
からんや、遠からずして更に再た之を強
求し、依て以て勢力を張るの基礎と爲さず
んば已まざるべきなり。殆んど火を賭るより
も瞭らる也。
吾人の生平、扶掖啓蒙を以て最鄰近に對す
る方針と爲す。豈、微毫だも争奪分割を是
れ事とするがごとき陋心を存せんや。然れ
ども列強既に彼れの如き政略を以て各々勢
力を張るの基礎たらしめんことを競ふ。我

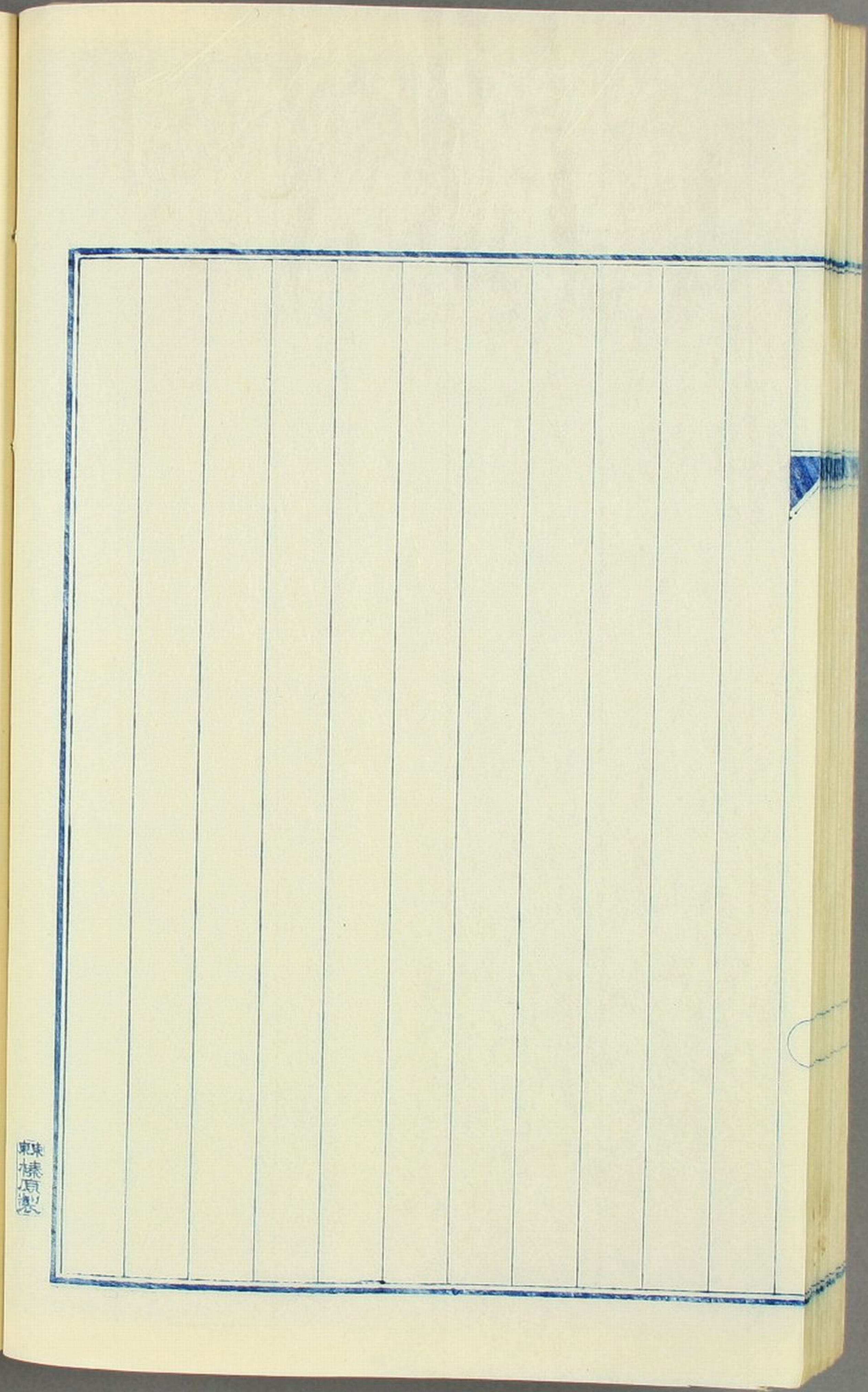
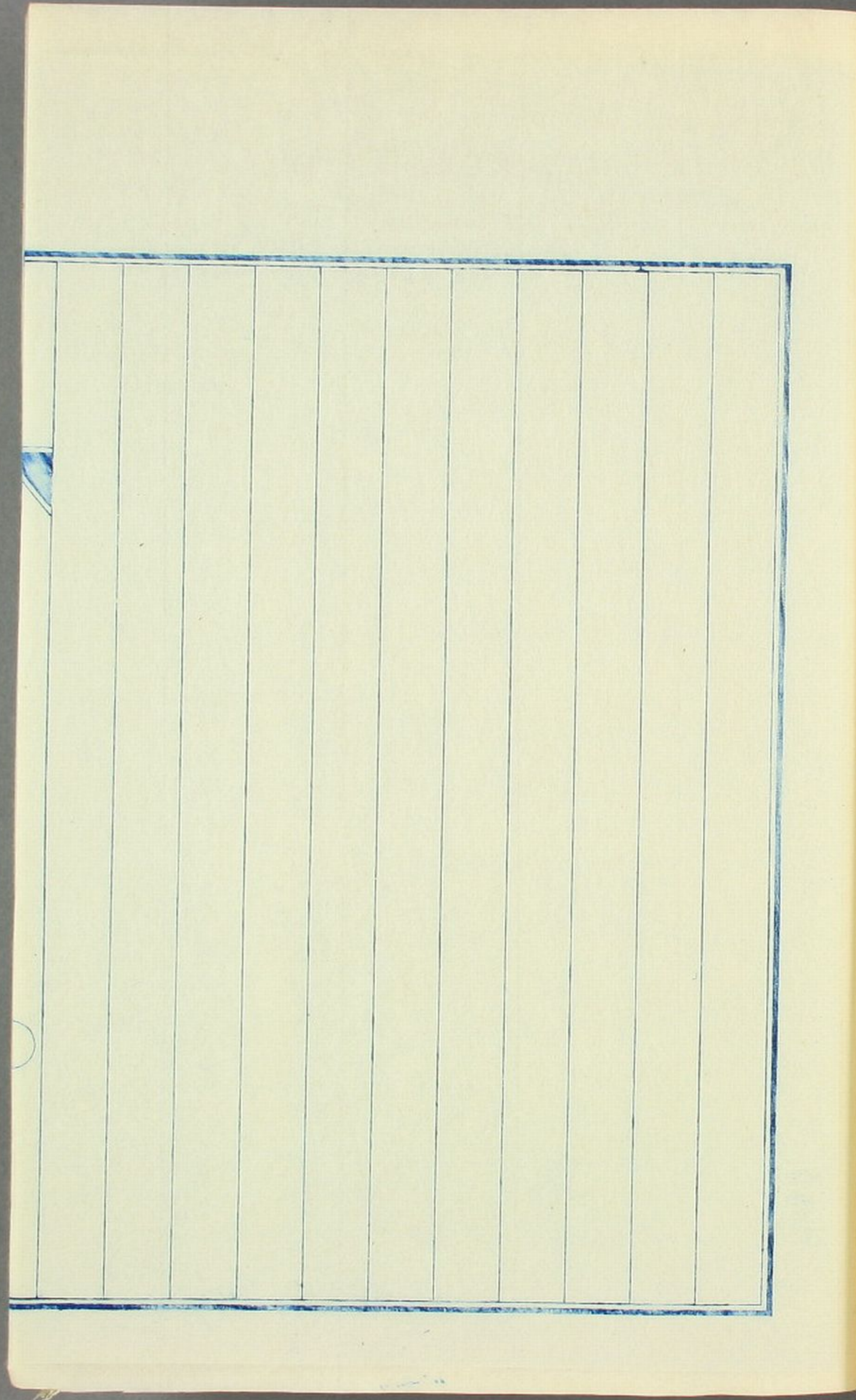
還曆祝園遊會の天氣のよし塲處のよし主人公の
人望の無比だから招かれた人のさすがの廣き園内
に一ぱい満ち所々でんがく、すし、天ふら、もち
やの勿論人形より、清元、祭文、居合ぬき其外の見
せ物擬ひも皆見物でうづまつた其中にいとおかし
かりし圓遊一派の一人が深あみがさを冠りて辻
下者に擬して相手に落語家を一人置き賣下者
の擬をして居た、此處へ二三人でたんと人が溜
らなかつた、すると石黒男爵が清浦法相を誘ふて
どうです一ツトふてもろふていとて相連立ちて參
られて第一番に男爵が左の手を出してトはせなす
るとト者の男爵の胸邊に勳章のピカ／＼したのを
見て、誰と見そなたか、咳一咳して説出して
曰く一体此手の相極めて結構で内閣を司されば
其内閣の大丈夫で動かない、なせなれば内閣の桂

●若松製鐵所の失敗

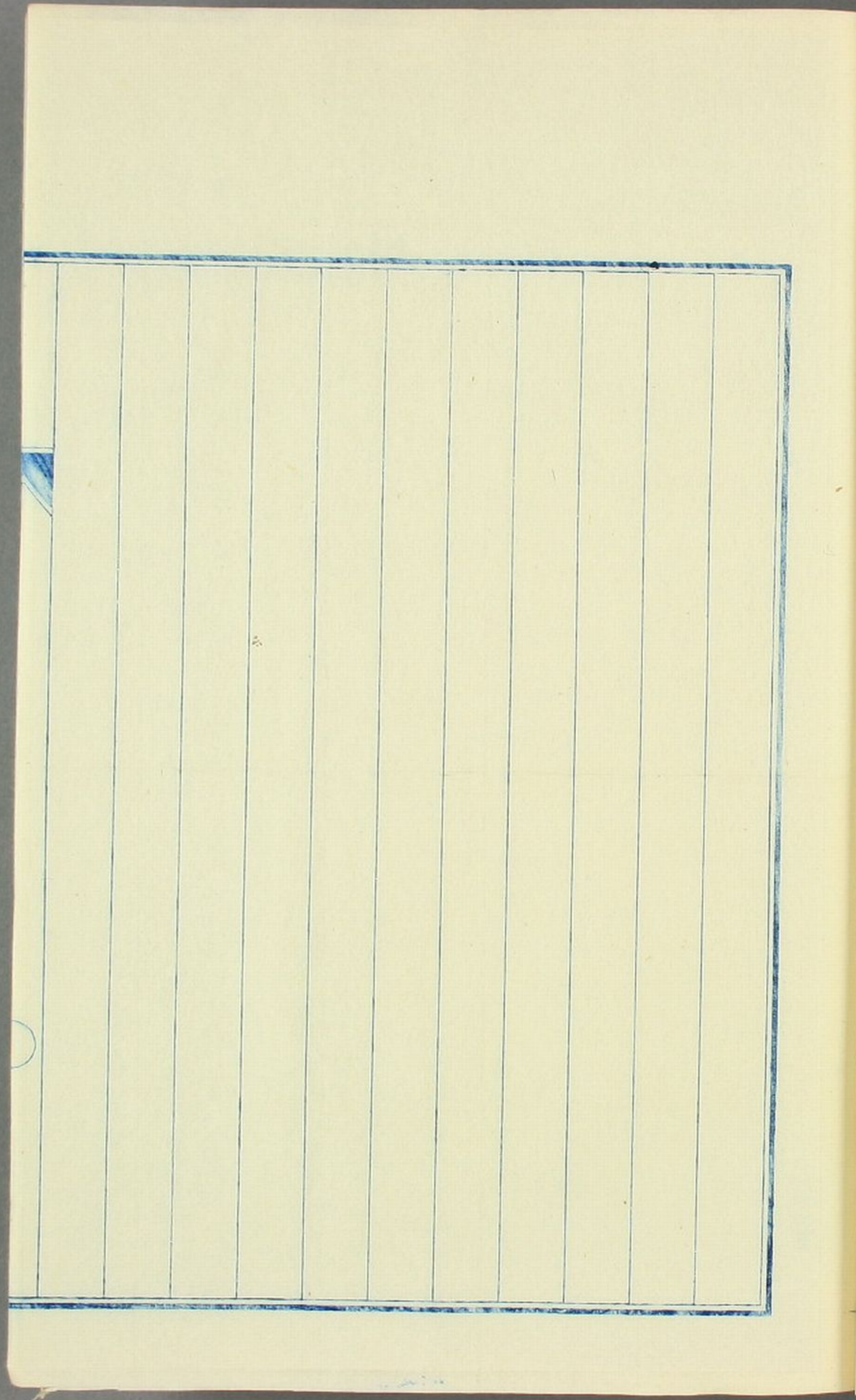
農商務省が馬鹿々々しくも祭壇然たる若松製鐵所の開業式を行へるの規模の宏壯なる事業の手續を貴衆兩院議員に見せ付け例の六百万圓の追加を承諾せしめん魂膽なりしも、當日鑄鐵の其の蓋明かすして御臨場の小松宮殿下も立往生の姿をならせ玉ひ衆客皆茫然たりしが、次で鐵軌の試作に移るや、鑄鐵早く已に冷却して形をすらすら為さず技師職工の不熟練言語に絶して鐵で失敗に終りしり、議員間の物議少からず鑄鐵爐の不完全を疑ふて當局の處置を評するも、其の前途に不安を懐くもあり、去れば政府の同製鐵所の不足額六百万圓を本年度以後の繼續事業とし、當季議會に追加預算として提案する筈なれど、其の通過幾んど憂東なき形勢なり

●製鐵所の不結果

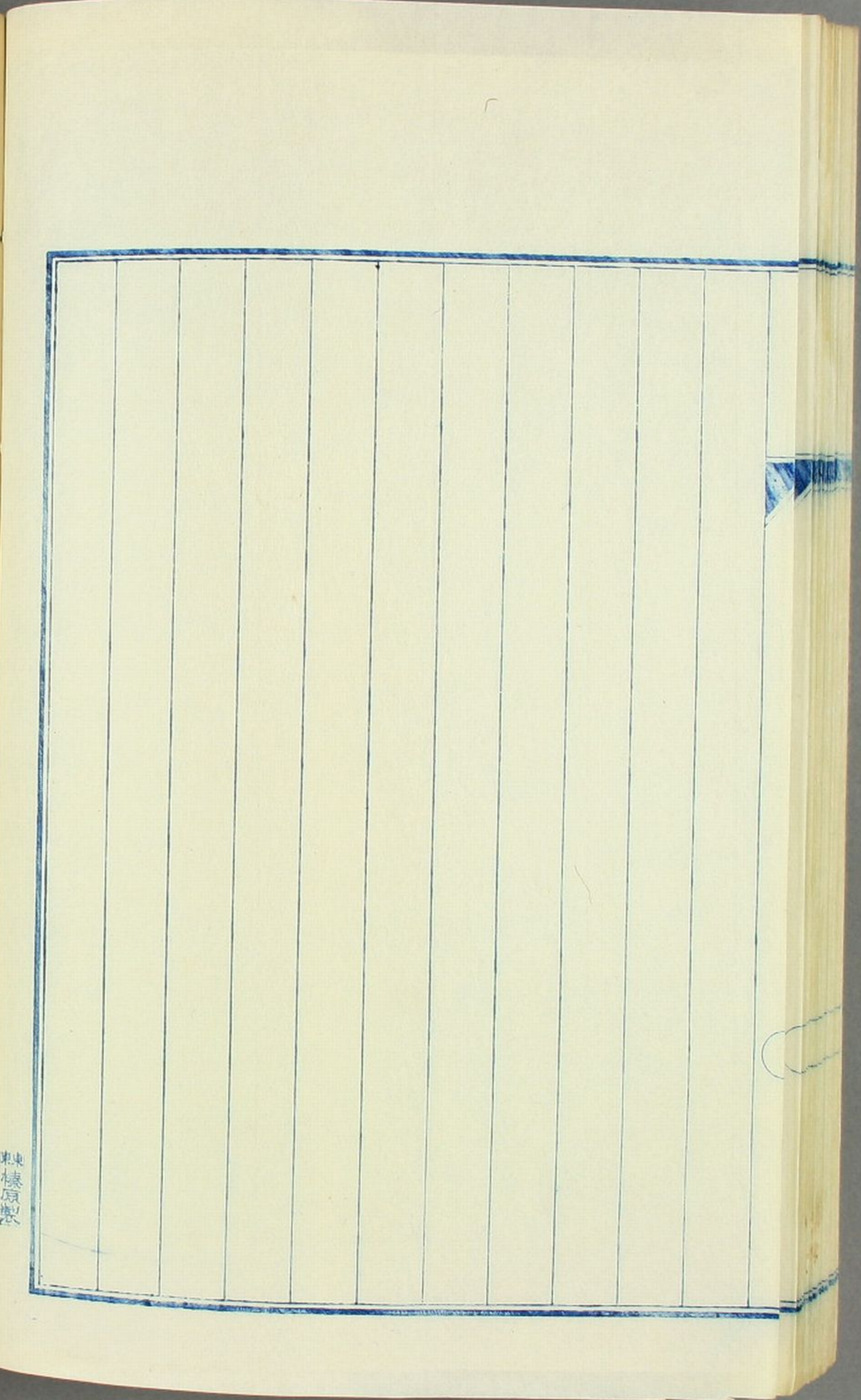
枝光製鐵所の其規模の大なる設立費の巨額なる洋人技師に高俸を給する等より見れば、真に東洋絶無の大工場なるべきに、其設計の粗漫なると技師職工等の不熟練なる為め、早くも失望の聲を放つものあり、過般舉行したる作業開始の際、鑄鐵爐の不手際にして、溶解したる鐵が釜蓋の開かざる為めに流出せず、一時間餘も過ぎて其儘になりたる如き鐵軌製造が熱したる鐵條をレールに引延ばさんとしても半途にして冷却し、是亦不結果に終りたる如き貴衆兩院議員、當局大臣の環視殊に伏見宮殿下御臨席の晴の場所にて、斯る失体を演じたる事として、昨今和田長官を非難する者多く、政友會側にて、今期議會の一問題と爲さんと同製鐵所の實況調査に着手したる由

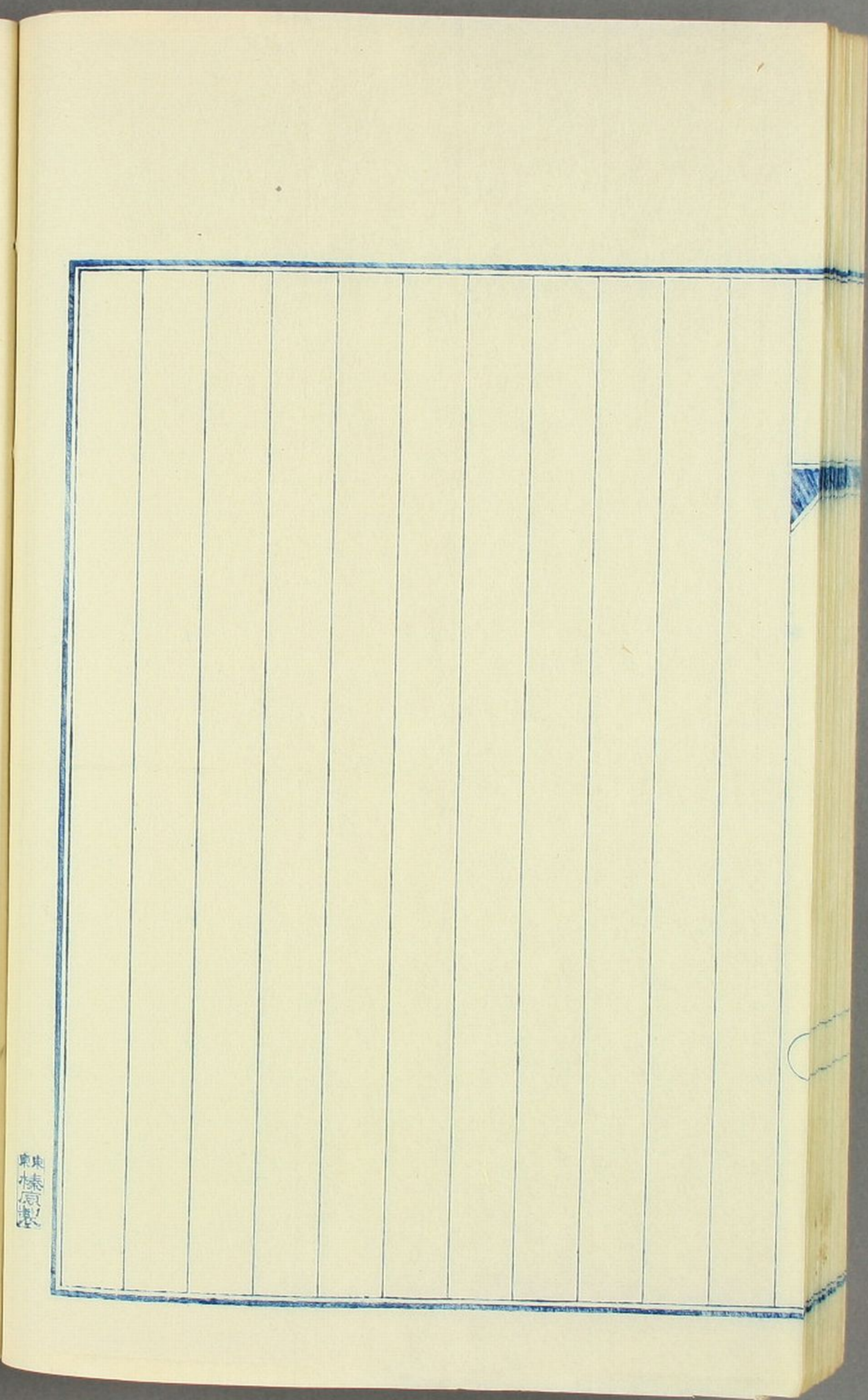
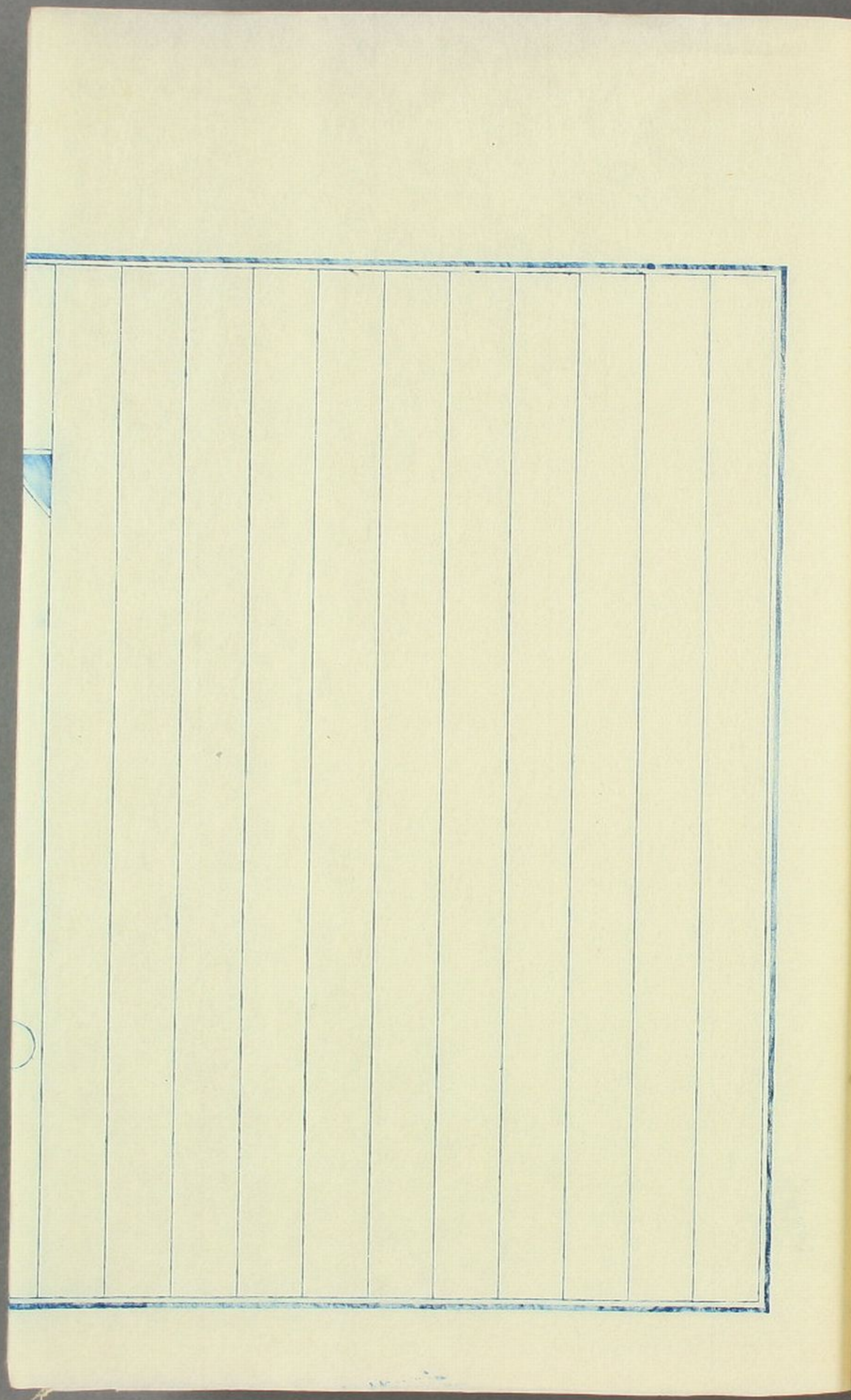


縣標原製



東
林
原
集





東洋
製本

第三種郵便五十年

賣新

議員を買収し、市民を誘惑し、以て市政の全權をクママニー、ホールの一手に横奪せるものなり、此の如くにして彼等の公金を拵取せり、銀行と結託せり、賄賂を收受せり、租税を濫取せり、請負といはれ買上といはれ賣下といはれ、彼等が公共の名の下に土功を起し事業を企て、而して之によりて獲たる所のもの、悉く之を自家の財囊に収めたることを幾何ぞ、其前首領たるトナードが僅か數年の間に於て千二百萬弗の巨財と贏ち得たりといふの一事を以てするも、其如何に腐敗の激甚なりしかを想察するに餘あり、然れども天定されば人に勝つ彼等の擧横の餘或は刑辟に觸れ、或は牢獄

長きを支へたるに反し、和製のクママニー、ホールが三年の命脈を専ら維持すること能はざりし、所謂和製の和製たる所以にもよるべけれど、東京市民の政治的道義心が、昨比較的に鋭敏なるにも由らざらざらば、今や區會議員の改選に際し、各區の競争漸く激烈ならんとし、處々都市懇話會派の醜聞を傳ふるものあり、一言以て東京市民の注意を促すものなり。

報

伊藤侯獨帝に謁す

獨乙皇帝陛下に、再昨日伊藤侯爵を召され親しく謁見仰付られ種々の御談話を賜り引續き内閣總理大臣ビュロー伯、外務大臣リヒトカーン男等に會見午餐晚餐等の饗

讀賣新聞

十一月廿五日 (月曜)

「裸躰論」に就て

一昨飯前田榮土代町の青年會館に開かれたる學術演說會に於て理學博士平正五郎氏の演說せる裸躰論の裸躰其もの定義、裸躰畫の起元及び陸し達の起元、の三つに別ちて講演したる者にして時節が面白き節多ければ左に其の要領を記すことなし

私、が今晚皆さんにお話し仕様と思ひますの先日の白馬會に出品された黒田氏の裸躰畫に就いての問題でなくては裸躰其もの定義に就いてお話しをせうと思ふのであります

△裸躰といふ意味か 裸躰畫問題の出したの餘程古い事、十年前前に矢張り黒田さんが書てどつかへ出した事がありましたが其れから度々大問題となつて學者の説も殆んど言ひ盡してある様で、裸躰其の者に就ての意見の多なたのもまだ聞た事がありせんから、裸躰即ちハダカと云ふもの何であるか、と云ふものを裸躰と云ふのであるかと云ふ事に就いてお話しをせたいと思ふ、是、今後益々裸躰問題の盛んになるべき現今の形勢として決して奮く極めて走りの説であらうと思ひます

で、色々字引杯を調べて見まするに物集定見氏の日本大辭林に「ハダカ」を脱いで肌を現はしたのであると書いて有りませが然らば衣服の無いものをハダカと昔の雲助の様に衣服を持たない者ハダカとして脱ぐ事が出来せんから衣服の無いものを裸躰ハダカと云はれないことになつて來る故に此定義の不完全といはなければならぬ、次に矢張り同時代の大槻文彦氏の字引を見ると「裸躰ハ肌明の約にてハダカなり衣なくて肌の現はれたるもの」斯う書いてありませ、其れなら身軀の上部即ち顔、頭等ハダカと云はれませ、足に衣のないものハダカと云はれませ、其の外色々西洋の字引杯も調べましたが何れも衣服なきを裸躰として有る位で之れが完全であると認められる者一つもありません

然らば如何云ふのが裸躰であるか、手、足、顔、頭等を出して居ても裸躰といふ無論云ひませ、併し肌の内若し胴を出したならば、裸躰と云ふのであります、之にハダカハ文字が一番完全して居る、支那のハダカの文字ハ裸、裸、裸と書たものが第一の

果の衣第二、果の身第三の面倒だから云ませんが之れが一番理に嵌つて居つて所半ハハダカと云ふ意味で文字の組立が大に善いと思ひませ、其外現今日本で書い居りますの裸躰、裸躰、赤身、光身等ありませ、又支那でハ生れつきの裸躰即ち裸躰、蛇、蚯蚓の様なものを裸躰と申しして此の裸躰の長、何でありませしやかと云へば人間が裸躰の長であるといつて居ります尤も人間の中でも野蠻人種杯にハ生れつきの随分毛の澤山生へて居る者も有りませ、これ等の小部分を除いて其の大部分ハ生れつきの身と覆ふものがありませんから裸躰の長杯と云つたものでありませしや、又人間の中に就て云へば胴の部分と現したのを裸躰と云ひ全部を現はして居りますのを赤裸躰と云つて居ります是が即ち完全な定義でありませしやう。

英國グラスゴウ大博覽會通信
十月十七日 於蘇蘭具府 窪田生
(第三便)の三

終に臨んで左に雜聞の二三を記すべし

△博覽會の雜沓 九月中旬よりシーツンケツの割引入場券と發行したるにより入場者一層便利と得殊に労働者のため午後七時より半額の料金を以て入場せしめ隔夜にハ火と電氣裝飾とを以て觀覽者の餘興を添へ、これハ毎夜降雨だになくハ會場内ハ非常の雜沓にして殊に附近の市都より鐵道の割引券發行等の爲め來集する老幼男女の集まどき殆んど歩行もならざる位に至るといしから、土曜日の夜の如きハ上流人士ハ出て入場せ、労働者の酒を嗜むハ何國も同じことながら此地の労働者も例のスコツトホエスキーに半日の愉快を買ひ夜に入りて市中ハ勿論會場内ハ酔ハライの醜體を流せると少からざれば喧嘩ハ甚だ稀れなり

△氣候 當國の氣候としてハ本年ハ暖く日つ好天氣なるなりと聞けども此頃ハ連日曇々たる細雨にあらざれば濛々たる霧烟にて秋空如鏡とか秋高く馬肥とか云ふ如き日本風の秋氣ハ絶えて望むべからず、日漸く短く朝ハ六時半に明け夕五時半に暮る之れより益々短日となり博覽會も電燈を用ふる時間の方却て多き時もあるハし

△明年の愛蘭博覽會と日本 明年愛蘭のコーンにてハ此の博覽會にも劣らぬ設計

果の衣第二、果の身第三の面倒だから云ませんが之れが一番理に嵌つて居つて所半ハハダカと云ふ意味で文字の組立が大に善いと思ひませ、其外現今日本で書い居りますの裸躰、裸躰、赤身、光身等ありませ、又支那でハ生れつきの裸躰即ち裸躰、蛇、蚯蚓の様なものを裸躰と申しして此の裸躰の長、何でありませしやかと云へば人間が裸躰の長であるといつて居ります尤も人間の中でも野蠻人種杯にハ生れつきの随分毛の澤山生へて居る者も有りませ、これ等の小部分を除いて其の大部分ハ生れつきの身と覆ふものがありませんから裸躰の長杯と云つたものでありませしや、又人間の中に就て云へば胴の部分と現したのを裸躰と云ひ全部を現はして居りますのを赤裸躰と云つて居ります是が即ち完全な定義でありませしやう。

閱覽室

陳
漢
章

明
第
十
一
月
下
浣

春
城
閑
人

明
第
十
一
月
下
浣

第
十
一
月
下
浣